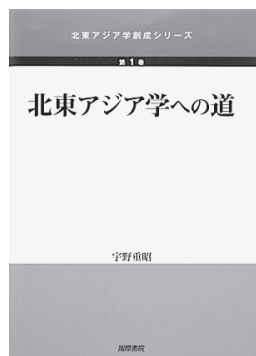


宇野重昭著

北東アジア学への道

国際書院／2012年11月／394頁／4600円



平野健一郎

本書の性格

本書の著者宇野重昭氏は、一九五〇年秋に「中国地域研究の世界に」入られて（本書「あとがき」三三三頁。以下、本書からの引用などの注記には頁数のみを示す）、爾来今日まで日本の中国研究、アジア研究を牽引してこられた方である。常に国際的な連関と国内地域との連関を意識した「地域研究」の推進者として、学界筆頭の位置を占めてこられた。長らく成蹊大学にご勤務ののち、二〇〇〇年四月に設立された島根県立大学の初代学長として、その準備段階から同大学における「北東アジア学」の創成を引っ張ってこられたことは、すべての読者をご存知のことであろう。島根県立大学における「北東アジア学」の今後の発展は宇野氏の宿願であり、実際、本書は同大学の研究者による続巻が予定されている「北東アジア学創成シリーズ」の第一巻である。

「北東アジア学への道」というタイトルから、読者は本書に、これまでのの、

島根県立大学を中心とする日本における「北東アジア学」形成の経緯とこれからの発展の道が述べられていることを期待するかもしれない。確かに、第一編「北東アジア学への入り口」と第二編「北東アジア学構築への試み」では、その半分ぐらいの分量で、著者の「北東アジア学研究」設立の経験が語られている。しかし、残りの半分、そして後半の第三編「近代のアイデンティティ——中国と日本」で語られているのは、これまでの著者自身による、あるべき「北東アジア学」の模索と今後への課題である。本書について、著者自身は「自己の研究者としての体験を総括しなおし、アジア地域研究の発展過程の歴史を忠実に追いつ直した」と総括している（「自著を語る——『北東アジア学への道』刊行に寄せて」島根県立大学北東アジア地域研究センター『NEAR News』第四三号、二〇一三年三月、一頁）。本書は、戦後日本の中国研究のリーダーによる総まとめの書として逸すことができないだけでなく、戦後日本のアジア研究に著者が占め

た地位に鑑みても、アジア地域研究にとつて、その意義はきわめて大きいといえる。以下には、書評子が考える本書の意義の一端を書き記すことにしたい。

著者が中国地域研究の世界に入ったとされる一九五〇年秋は、著者が東京大学教養学部後期課程の教養学科国際関係論分科にその一期生として進学された時期だと思われる。書評子は著者の八期後輩に当たるが、先輩について本書で初めて知ったことの一つは、著者が草創期の教養学科国際関係論での教育を十分に（後輩の私などよりはるかに真剣に）吸収されたということである。そこでの総合的な基礎教育を肯定的に受け入れたことが地域研究の土台となり、特に専門外の科学史・科学哲学の講義から地域の考察に本質的な影響を受けられたとのことである。驚いたのは、著者がいわゆる「文転生」（理科生として大学に入学し、途中で文科系の学部・学科に転科した学生）であったという事実であるが、そのことは著者のその後の研究観、中国観に深い影響を残した点で意義深いものがある。

あとも見えるように、著者は地域の特徴をまずは科学性あるいは（合）理性によつて捉えようとする意識を強く持っている。科学万能主義ではないが、科学主義である。しかし同時に、地域研究の基本的な尺度として「情念」を重視すべきことを繰り返し強調する。近代西欧科学の一部としての社会科学の方法論によつて、たとえば中国、たとえばアジアという対象を分析する研究では、情念を合理的なものとして排除するか、合理的な方法によつて解消すべきものとするのが普通である。ところが、著者は科学主義とバランスさせるかのように「情念」を強調し、近代西欧の科学主義そのものが神、信仰という情念との拮抗を含んでいたことを指摘して、理性と情念の相互関係を重視することが必要であることを説くのである。この、理性対情念の拮抗という視点は、著者の地域研究者、中国研究者としてのスタートラインであったばかりでなく、著者が主唱する「北東アジア学」の核心をなすものとして、重要である。

北東アジア学とは

もう一つ予想外のことがある。読者の多くは、「北東アジア学」とは「北東アジア」という一定の地域、すなわち、おおよそにせよ地図上で区切られる特定の地域を対象とする地域研究であることを予期し、どの国とどの国が「北東アジア」に含まれるのであろうかと予想しながら、本書を繙くであろう。しかし、著者はその予想を完全に裏切る。著者が巻末の文献解題で紹介している環日本海学会編の『北東アジア事典』（国際書院、二〇〇六年）は、「北東アジア」にはロシア極東、中国東北三省、モンゴル、南北朝鮮、日本を含むとしているが、著者はそういうことを本書のどこにも行っていない。わずかに、終章「まとめに代えて」の一頁（三五五頁）に、形を変えて、中国、日本、アメリカ、北朝鮮（および韓国）、台湾、ロシア、モンゴルを列挙しているだけである。あるいは、東南アジアと南アジアを除くアジアにアメリカと極東ロシアを加えるのが適当な地

域の捉え方であることを数回示唆するにとどめ、著者はむしろ「地域であって『地域』でない北東アジア」と表現することも辞さない（『NEAR News』第四号、一頁）。地域を具体的に特定しない地域研究が可能であろうか。このような地域研究としての「北東アジア学」によつて、たとえば島根県立大学という研究組織をリードして行くことができるのであろうか。

著者にとつて地域とは、国際関係の中で所与の客体として先験的に定まっているものではない。地域が地政学的な単位として、統治あるいは支配、外交関係の対象となるものではない、という見解は、二〇世紀の地域研究の前提とは異なるものであるが、今日では多くの人々の賛意が寄せられるであろう。言い換えれば、地域はそこに住む人々の主体的な意識によつて生まれ、また変化するものであるということである。著者は、最近のグローバル化によつて、「『地域』という概念そのものが動的概念に転化した」ともいわれる（『NEAR News』二頁）。最

近の研究者の中には、国際関係の単位として「国家」を相対化するために、すべての単位を「地域」とみなすほどに、「地域」概念を重用する傾向も見られるが、著者の地域概念はそれとも異なるように思われる。グローバル化によつて、さまざまなものが地域内を動き、地域の境界を越えても動くが、著者のいわゆる「動的な地域」とはそれとも異なり、われわれがある地域をどう見るかによつて、その地域の見え方が異なってくるという意味であるように思われる。

つまり、「北東アジア地域」とは、北東アジアという地域をわれわれがどう見るかによつて、地域としてのその姿をはつきりさせてくるような世界である。著者にとつて、北東アジアは一つの「知的世界」である（『NEAR News』二頁）。どう見るかがもつとも重要なのであり、地域は見る者が主体的に創り出す世界である。そして、近現代の北東アジアは、近代史の中で「西欧の衝撃」がもつとも遅れて到達した地域であると共に、西欧文明をもつとも発展させながら、しかも

異質的であるアメリカとロシア・ソ連の二超大国が浸透した地域であり、今日のグローバルイノベーションを世界同時に経験している地域でもある（「はしがき」九一―一〇頁）。現代は、「西欧に対するアジア主義を主張している時代ではない。」

『西洋の衝撃にたいするアジアの反応』の時代でもない。世界的変動に対するアジア地域の自己表現、自己のアイデンティティを国際的レベルに高める時代である（「あとがき」三七―三三頁）。長年、営々と理解に努めてこられた「北東アジア地域」を、現在、著者はこのように把握する位置に立つておられる。書評子の素朴な表現で言い換えるならば、今日、われわれは日常世界の地域に生きると同時に、北東アジアに生きていたのであり、それは期せずして世界をも生きていくことなのだという認識である。著者の表現に戻れば、北東アジアを対象とする「北東アジア学」とは、「北東アジアという知的世界の分析」であり（『NEAR News』一頁）、「北東アジアの現場から出発し、北東アジアの現場の中から世界

史的課題を抽出し、その北東アジアから見た世界史的課題を世界全体の歴史的動向の中において比較考察し、さらに世界化された北東アジアの原理において、再び北東アジアの現場研究を体現化している」とするものである（「はしがき」一〇頁）。

あらためて地域研究のあり方を考えるならば、著者自身が地域研究を、(1)既存の学術的立場から地域を精密に分析しようとする近代的・科学主義的立場、(2)それぞれの地域の現在を近未来の可能性の展望の下に開発して行こうとする「地域学」の立場、(3)地域の過去および現在を通して世界史的な課題を追求しようとする立場、の三つに類型化し、著者の地域研究が第三の立場に立つものであることを明言している（二二―三三頁）。このもつとも複雑で高等な地域研究は、著者によれば、冷戦の終焉以後「地域研究から入って地域研究を抜け（超域研究へ）、アジアに密着しながらアジアという表現に執着しないことが一般的になつた」（『NEAR News』二頁）ことの反映

である。著者が郷里の島根で島根県立大学の創設に関わった際に考えられたのは、「地域の問題を国際問題につなげること」であり、北東アジア学を「国境を超えた地域学として誕生」させることであった（「あとがき」三七―三三頁）。「地域であつて『地域』でない北東アジア」という表現はそういう意味であろう。

理性と情念

地域をこのような地域として捉えることは、言い換えれば、個々の地域をその地域の特徴によつて捉えると同時に、すべての地域に共通するものを捉えるということである。特性と共通性によつて地域を理解するための基軸として著者が強調するのが、理性と情念の拮抗である。

この難解な骨組みを理解しない限り、著者の地域研究論を理解したとはいえないし、本書の中心部分にも進めない。二〇世紀後半の地域研究は、それぞれに特徴を持った地域を、近代西欧の（社会科学に含まれるとされた）合理性によつて共通的に理解しようとするものであつた。

しかし、それはもはや通じない。二〇世紀から二一世紀へと近代西欧の時代が終ったからではない。著者によれば、そもそも近代西欧の「理性」は西洋の「神」と組み合わされたもの、すなわち、特定の「理性」と「情念」の組み合わせにおける「理性」であって、超越的普遍性を主張しうるものではなかったからである。

(加えて、現代のグローバルゼーションによって現実の共通化が進んでいる時に、地域ごとの特徴化が亢進している事実によって、その点がいつそう明白にされる、ということをつけ加えれば、著者の主張をよりよく理解することができるであろうか。)

それぞれの地域にはそれぞれの組み合わせの「理性」と「情念」がある。それぞれの理性と情念の組み合わせが存在し、拮抗することが地域に共通のメカニズムである、というのが著者が繰り返し述べていることだと思われる。西欧的理性が絶対なのではなく、理性は多元的であるべきであるとし、情念のみが強調されるような地域(たとえば日本)についても、

「それぞれの地域にはそれぞれの人々が納得する『理性』が創成されなければならぬ」と著者は主張する(『NEAR News』二頁)。環境の変動と歴史の転換に地域(の人々)が感情的にのみならず、理性的にも対応して行くことが地域の特性を作り出して行く。

そして、ある地域について、どのような理性と情念を特徴として取り上げ、どのように関連させるか、地域研究にとって重要なその操作を「知性」に行わせる、という構造が著者の地域理解の基本的な枠組みであると思われる。理性と情念を知性によって観察する、というのが「地域を知的世界とする」地域研究の所以であろう。著者の知性は、今回、本書において「理性と情念を、むしろ情念の側を強く認識して整理しようとした」のである(『NEAR News』二頁)。かくして、地域の「継続的自己認識」、つまりアイデンティティが地域を理解するカギとなるのである(同右)。

中国(と日本)をどう理解するか

以上のような地域理解の方法論を示したのち、著者は、本書の後半分の第三編(「近代のアイデンティティ——中国と日本」)、第五章から第九章までを使って、中国と日本をどう捉えるかを丹念に説いている。本誌全体の主題からいっても、著者の功績からいっても、著者の中国理解が関心の的となるのは当然であるが、中国と日本の対比・比較対象が重要である。その対比は「北東アジア学」という設定課題からいっても見逃すことはできない。著者自身は、「中国と日本の近代的アイデンティティ創出の歴史的的分析と比較論は、筆者の専攻してきた分野なので、……自分の従来研究成果を大づかみに総動員した」と振り返っておられる(『NEAR News』二頁)。まさに、著者の弛みない対象理解の努力が大量の読書ノートとなってこの部分に博引される様子は、書評子ならずとも驚嘆するであろう、本書のもう一つの特徴である。それを敢えて要約するならば、中国と

日本は近代西欧への対抗においてアジアの共通性を示すが、対抗の仕方には重要な差異(特徴)があった。日中間の差異とは、対抗の軸があつたかどうか、である。

中国の近代西欧への対抗に関して、著者が単純な「西欧の衝撃」説をつとに却けてこられたことはよく知られている。

著者が「内発的發展論」共同研究に積極的に参加されたことも知られているが、近代西欧(と日本)の植民地主義・帝国主義がなければ、中国も自ら近代化を遂げたはずである、という態の単純な理解ではなかつたであろう。また、(日本と違って)中国は近代西欧に主体的に、徹底的に抵抗を続けたというこのみを強調しているわけでもない。中国にも日本にも、そして北東アジア全体にも、まず外から近代西欧の強大な圧力がかつたことが「近代北東アジア」のはじまりであり、それは歴史的事実として前提にせざるをえない。重要なのは、北東アジアが、中国が、日本がそれぞれの地域の内部にいったん外力を引き受けたのち、それによつてどのように反発したかである。北東

アジア、中国、日本の近代は、それぞれの地域の反応の外発性か内発性かのいずれかの結果ではなく、外発と内発の力のねじれ合い(あるいは、「相互触発」)の結果である、というのが著者の見方であると理解される。

そこで次に重要になるのが、中国と日本における外発と内発の力のねじれ合いの違いである。その違い(と、その理解)には、著者がすでに前半で用意された「理性」と「情念」の拮抗ぶりの違いが絡み合う。著者によれば、中国と日本におけるこの二つの拮抗関係の絡み合いを代表的に表現しているのが、「中体西用」と「和魂洋才」である。著者のいうとおり、「和魂」と「洋才」は切り離されておられ、「和魂」の情念性が過度に強調される一方、「洋才」は日本人の内に十分理性化されないまま突っ走る傾向があつた。他方、「中体」の「体」は本質であつて、そこには元々「理」が含まれ、「用」はその応用である。著者は、「日本の『魂』と『才』の間には、中国の『体』と『用』のような緊張かつ相互関係のよう

な有機的連関性がない」と指摘している(二六八頁)。一瞬逆ではないかと思われるほど、中国で繰り返し「全面欧化論」が噴出するが、それは、「用」が「体」につながっているからだという著者の説明は説得的である。これまでの中国で「(中国的)科学主義」が繰り返され、今後も実験的に徹底した「科学主義」が採用されるであろうことを予想すると、興味深いものがある。

ところで著者は、第八章「日本近代の特質」において、近代日本の対抗の軸となりえたかもしれないものを次々に探している。その中で書評子にもっとも意外で、もっとも興味深かつたのは、竹内整一(『自己超越の思想——近代日本のニヒリズム』、『日本人は「やさしい」のか——日本精神史入門』)によつて展開されたという「あわい」論、というよりも、その「あわい」にまともめられる「おのずから」と「みずから」の対比であつた。近代日本人が「和魂」に依存しながら、「洋才」で突っ走ることができたのは、「みずから」(自己)の責任を負わずに、

「おのずから」（自然）に任せたからではなかつただろうか。原発事故の前後の顛末を想起するだけでそう考えるに余りある。近代日本が近代西欧科学（理性）に對抗するには余りに弱い軸ではあるが、日本の「自然」を西洋の「神」に對置することは可能であろう。そして、中国の對抗の軸は日本のそれよりもはるかに意思的な、強靱な何物かであるように思われる。外来物を深く内部に引き込んで、それに対抗する内部力をはるかに強靱するに違いない。宇野中国学を繼承するには、中国文化の内にさらに深く入り込んで、情念と理性の絡まりであるその何物かを探し続ける必要があるであろう。

北東アジア学の今後の課題

地域を自他ともに地域として認識するメルクマールは、著者も指摘するとおり、そこに住む人々のアイデンティティ（継続的自己認識）である。そのアイデンティティは、地域ごとに特徴ある情念と理性の絡まりを、知性によって意味づけしたものの、というのも著者の指

摘するところである。とすれば、北東アジアという地域に特有のアイデンティティも次第に濃厚になって行くであろうように、北東アジア地域の中でも、中国、日本以外に多くの部分地域が特有の情念と理性と知性によって特有のアイデンティティを主張し続けるであろう。特に韓国・朝鮮は、極めて特有かつ重要なアイデンティティを持った地域であり、中国、日本に劣らないアジア代表性を有している。地域アイデンティティの究明はこれからますます行わなければならないが、「北東アジア」という一つ上のレベルの地域に中国と日本を包み込む途端に、中国と日本をそれぞれば単一のアイデンティティによって比較対照することがどこまで可能か、それは、両者が近代西欧と対峙し、それぞれに国民国家を創ろうとした近代に限って可能かつ必要な方法なのではないか、という問題に直面する。

というのは、中国、日本、その他の地域の内部にも、さらに複数の、多様な部分地域・社会がもともと存在し、グロー

バリゼーションの進行にともなうて、そうした地域・社会の特有性がますます顕著になって行くと思われるからである。たとえば中国を、一枚岩として理念的に理解しようとするだけでなく、中国をどう細分化した上で、それぞれを理解し、その上でそれらをどう統合的に理解して行くかが、これからのアジア地域研究の大きな課題であると思われる。

要するに、グローバリゼーション下の地域研究は今後どうあるべきであろうか。その一つの方向は、繰り返しになるが、重層的な把握ということであろう。すでに人々が生活を営む地域は複数のレベルにわたって重層的に存在し、それはけつして相互排他的ではない。北東アジア地域は、そうした重層構造のかなり上のレベルにあつて、次第に一つの地域として実在性を帯びて行かなければならない。

もう一つの方向は、トランスする（超える）ことである。具体的に、国境を越え、地域の境界を越えて、さまざまな移動が活発になっているが、人々の意識、

文化が重層構造のレベルを超えて意味を持つようになることを考察することである（参照：汪暉著、石井剛・羽根次郎訳『世界史のなかの中国——文革・琉球・チベット』青土社、二〇一一年）。

著者宇野重昭氏は、本書において、これまでの「北東アジア学への道」を総まとめされただけでなく、島根県立大学にとどまらない多くのアジア研究者に向けて、これからの「北東アジア学への道」を指し示している。